

議事録

1. 参加者

運営委員

- 本津 茂樹(近畿大学 名誉教授)
- 野村 明仁(茨木市立西中学校 校長)
- 諏訪 年信(茨陵会 理事)
- 中園 ひとみ(大阪府立茨木工科高等学校 元PTA 会長)
- 丸尾 弘子(大阪府立茨木工科高等学校 PTA 会長)
- 俵 比呂志(春日地区自治連合会長)

事務局

- 杉山 裕二(大阪府立茨木工科高等学校 校長)
- 井上 直人(大阪府立茨木工科高等学校 教頭・事務局長)
- 龍 忠男(大阪府立茨木工科高等学校 首席)
- 橋爪 勇一郎(大阪府立茨木工科高等学校 首席 兼 工学系系長)
- 岡 和憲(大阪府立茨木工科高等学校 教務部長)
- 東郷 真明(大阪府立茨木工科高等学校 生活指導部長)
- 川地 良明(大阪府立茨木工科高等学校 進路指導部長)

2. 令和3年度本校教育活動について

2-(1). 議題「令和3年度学校経営計画及び学校評価」(校長より)

Q&A

Q：自己評価2. (4)について、改革で創出された時間を新任者のOJTなど次世代育成に活用しておられるかお考えをお聞かせいただきたい。

A：確かに「働き方改革」として、勤務時間の減少が結果として出ています。しかし現状は、先生方一人ひとりが、今までの校務の無駄を省き、効率的にしているところで、改革によって時間が創出されているということは、まだまだ全体的に見えてこない状況です。ですので、学校全体での改革で創出された時間の活用はできておりません。

しかし、次世代育成などの取り組みとしては、令和3年度より指導教諭を配置し、いろいろな校務について初任者に指導をしているところです。

ともかく、先生方一人ひとりが、各校務に追われるような働き方ではなく、学校の発展のために時間を活用できる働き方になるように、今後も新たな取り組みを検討していきます。

2-(2). 議題「令和3年度 学校教育自己診断アンケート結果」(龍 忠男 首席)

Q&A

Q：教職員向けアンケート Q5,Q6 について、「まったくあてはまらない」と回答しておられる先生が2名(4%)お出でになられる。「わからない」と合わせて8%~10%を占めていて、Q10の「わからない」で12%と続く。PDCAのC部分について、今以上に前広で自由闊達な意見具申ができる環境整備についてお考えをお聞かせいただきたい。

A：確かにQ5「問題行動やいじめ対応体制」Q6「教育相談体制」について、「まったくあてはまらない」の人数が、他の質問に比べて多いです。しかし、実は、Q5やQ6は、昨年よりも少なくなっています。実は、以前から問題視していましたので、令和3年度に、Q5に関係する。「いじめ対策委員会」について、実用的に本格始動をできるように組織を改善しました。また、Q6に関係する「教育相談体制」も、相談生徒が多い1年生の全員の教科担当をされる先生に、教育相談コーディネーターとして積極的に尽力いただき充実したものになりました。その影響で、教職員の認識が変わり減少しております。

また、PDCAのCというのが、学校教育自己診断アンケートと考えております。この結果を受け、学校教育自己診断の教職員アンケート用紙について、「まったくあてはまらない」「わからない」の場合は、できるだけ、自由記述欄を書いていただくように、今後検討していきます。また、根本として、ご意見をいただいたとおり、「前広で自由闊達な意見具申」ができる環境整備を、色々が形で実現をめざします。

Q：(生徒アンケート結果について)

どの診断内容(設問)においても肯定的意見の割合が高いことは評価できる。それでも3年生の肯定的意見の割合合計が昨年と比較して減少しているとのことである。この対策として生徒にとって本当に欲しい情報を直接伝えられるようにしていくとあるが、本当に欲しい情報とはどのようなものが考えられるのか。

また、工業系の高校であるので診断内容に「学校の施設や設備、実習機器は生活や授業がしやすいように整備されている」というような施設・設備に関する診断内容があってもよいのではないか。

(保護者アンケート結果について)

わからないが非常に多いQ9は「PTA活動に参加することがある」と変更した方がわかりやすいのでは。

(診断内容について)

保護者や教職員アンケートにおいて、肯定的意見の割合が高いことは良いと思う。しかし、保護者や教職員アンケートの診断内容は「教育活動に関するもの」と「学校経営に関するもの」から構成されるものであり、学校運営への校長のリーダーシップや教育環境の整備等の診断内容が経営に関する診断内容としてあってもよいように思う。

診断内容が教育委員会で決められているのなら、上記の診断内容に関する内容は無視してください。

A：(生徒アンケート結果について)

内容説明の資料にある、「Q3の3年生の肯定的意見の割合が90%から72%に減少している」「生徒にとって本当に欲しい情報を直接つたえられるように進路指導部を中心に検討してい

く必要があります。」という記述に対するご質問だと思います。まずは肯定的意見の割合が減少していることは、学校として真摯に受け止め、生徒一人ひとりに対し、進路情報の伝達不足であったと考えています。そのうえで、本当に欲しい情報の伝達を検討すべきとの分析です。

そのうえで、生徒が本当に欲しい情報というのは、生徒が自身の進路実現の為に欲しい情報と考えます。ですので、生徒の数だけあると思います。たとえば、「生徒一人ひとりの人生の為、どのような進路が向いているのか？」や「就職や進学の実験に合格する為に、生徒一人ひとりが、何をどれくらい努力しなければならないのか」など、適学適職検査や過去の卒業生の実績等のデータをもとに伝達するなど、多種多様であると考えます。根本的として、進路指導部を中心に、担任団とよく連携しながら、生徒一人ひとりに対して、きめ細やかな指導を粘り強く実施するしかないと考えております。ご理解をお願いいたします。

(保護者アンケート結果について)

「わからない」が非常に多いQ9については、PTA活動についてですが、実際、コロナ禍になり、PTA活動は殆ど実施されていません。つまり、活発ではありません。その分「わからない」の回答が多くなっていると考えます。ご提案いただいた「PTA活動に参加することがある」という内容にすることも含め、PTA活動の発展のために、PDCAサイクルを、どのように回していくのかという観点で検討をしていきたい。

(診断内容について)

診断内容については、府教育庁から例として挙げられており、それに則って、本校用にアレンジしております。保護者や教職員アンケートの診断内容について、「教育活動に関するもの」と「学校経営に関するもの」も例としてあったと思いますので、それを確認しながら、診断内容の再構築を検討してまいります。

4-(3). 議題「令和3年度 資格取得状況」(龍 忠男 首席)

Q&A

Q： 先生方の努力もあり、第1種電気工事士、危険物取扱者の合格者が増加して、例年並みに回復したことは評価できる。今後は情報技術検定の合格者を例年並みか、それ以上にするための取り組みに着手してほしい。また、ジュニアマスター顕彰の申請者を増やし、ブロンズやゴールドの表彰者数の増加策の検討をお願いしたい。

A： 第1種電気工事士の合格については、本校の過去最高の合格者数でした。また、危険物取扱者試験の合格者も、今年度より、環境化学システム系が合格者を増加させる為の取り組みを強化中です。

情報技術検定3級については、受験者数だけでなく合格率が減少しているのが顕著です。この検定は1年生の授業中に指導をし、全員受験をする検定です。令和3年度は、入試の志願者が少なかったこともあり受験者数が少なかったと考えられます。また、合格率については、生徒数減少とともに生徒の学習能力に変化があったのではと考えられます。指導方法等について教科担当全員で検討をするべきと考えています。これを機会に合格率を上げる新たな取り組みに着手するように推進してまいります。

また、ジュニアマイスター憲章は、複数の資格取得・検定合格・大会入賞の加算で、ブロンズ・シルバー・ゴールドに達した段階で申請となります。やはり難関ですので、殆ど3

年生卒業前に行います。今年度申請の3年生は、残念ながら、コロナ禍で資格取得や大会入賞の機会が少なかった学年です。結果的に、申請できる生徒が少なかったということだと思います。

今後のジュニアマイスターの申請につきましては、今年度、合格者が増加した第1種電気工事士や危険物取扱者はジュニアマイスターの点数があり、次年度以降は増加するのは間違いありません。ともあれ、このように、ご意見をいただいた以上は、今後とも、ジュニアマイスター憲章について、今まで以上にしっかりと意識して資格指導を推進していきたいと思います。

4-(4). 議題 「令和3年度 生活指導部報告」(東郷 生活指導部長)

Q&A

Q: ・2「身だしなみ指導について」

”ブレザー、ネクタイ(リボン)着用者が多くみられ良い傾向”と記述あるが、「決めたことを守るのは当たり前」という社会のルールを指導いただくことは難しいことでしょうか? ご見識をお聞かせいただきたい。

・3「交通安全指導について」

上述同様ですが、こちらの決めたルールは「法令」ですから、上項以上に順法意識を啓蒙していただきたいと考えます。お考えをお聞かせいただきたい。

A: いつもお世話になっております。ご意見ありがとうございます。

・2「身だしなみ指導について」

もちろん「決めたことを守るのは当たり前」という社会のルールを順守させることを目標にしていますが、以前は頭髪指導が中心になっており、ここ最近でやっと服装指導に着手できています。また本校の規定では「ブレザー・ネクタイ(リボン)の着用は推奨」であるため、絶対ということではありません。しかし、制服を正しく着用する当たり前のことを意識づけさせるためには、まずは式典(始業式・終業式)では必ず着用する規定を昨年度から取り決めました。そうすることで、徐々に身だしなみを正しくするという点は浸透していっています。

・3「交通安全指導について」

交通安全指導については、登下校中の事故も数件あったり、難しい課題ではあります。地域・関係機関とさらに協力しながら啓発をしていかないといけないのかなと考えています。

Q: いつも先生方の生活指導に対す努力に対して頭が下がる思いである。コロナ禍の影響で遅刻件数の増減についての成果がわかりにくい。特に母数となる生徒数が異なることもあり、年度比較の増減%の算出法を理解できていないこともある。生徒数が多くなれば当然件数も増えるので、もう少しわかりやすい比較法を考える必要があるのでは。

A: いつもお世話になっております。ご意見ありがとうございます。

遅刻数の増減の表に関しては、1人当たりの遅刻数を比べる割合を算出しています。ですので、全体数(生徒数)によっての値の増減は関係ありません。遅刻が多いか、少ないかの指標にはなっていると考えています。ただし、この表には生徒数の記載があるため、解

積しにくい部分があるため、もう少しわかりやすく作成するべきと考えています。

4-(5). 議題「(令和4年3月卒業予定者) 進路決定状況」(川地 進路指導部長)

Q&A

Q：現状で9名を除く進路が決定していることは評価できる。各系の進路決定状況において、機械系の未決定者5名のうち縁故・その他の3名の状況が不明であるが、年度終了時までには決定率100%をめざしてほしい。資料の過去5年間の推移において、工学系の四年制大学希望者・決定者が増えたことは評価できる。今後は②学年全体、③工学系の進路先内訳外に、工学系と他の系とは目指す進路が大きく異なるため④工学系を除く系の進路先内訳が必要のようと思われる。②が必要かは判断に苦しむ。

A：年度末終了時までには決定率100%をめざします。また、過去5年間の推移の中の、②学年全体の進路先内訳よりも、工学系以外の3系についてもいいのかもしれませんが、今後、検討いたします。また、進路決定先の所の(2)進学先についても、4系で分けて記載した方がいいかもしれないので、今後、検討させていただきます。

2-(6). 議題「令和3年度大学連携授業・特別講習年間結果」(橋爪 首席兼工学系長)

Q&A

Q：先生方のご努力に感謝申し上げます。

A：日頃よりご支援ありがとうございます。

Q：コロナ禍の影響で、大学との連携実施予定のキャンセルが多々生じたことは、仕方がないように思う。私立大学以外の福知山公立大学との連携がスタートしたことは評価できる。これを機会に国公立の理工系学部との連携増加が望まれる。

A：新型コロナウイルス感染拡大により様々なスケジュールが変更となりましたが、その代替で過去に取り組んでいないことにも着手できたと思います。次年度も大学との連携の他に、生徒たちの基礎学力向上のための取り組みに尽力したいと考えています。

2-(7). 議題「令和4年度学校経営計画」(杉山 校長)

Q&A

Q：大阪市立高校の府移管に伴う再編で、淀川以北の工業高校マップの変化による茨木工科高校の役割についてお考えをお聞かせいただきたい。

A：来年度より、大阪市立の高校が、大阪府立になるという状況ですが、今のところ、再編整備による工業を学ぶ高校の数の増減はありませんので、北摂地域唯一の工業科を学ぶ府立高校としての役割は、殆ど変化がないと考えております。

ただ、せっかく今まで大阪市立だった工業高校と一緒になるのですから、例えば、全国的に有名な都島工業高校から学ぶべき、学校経営はあると思いますので、情報収集をして、本校の発展のために活かしていきたい。

Q： 中期的目標、1.「確かな学力」の育成(1)のエにおいて、課題解決型学習（PBL）の導入の目標値を設定する。例えば「全科目中の〇〇%のPBL型授業の導入を目指す」。(難しいかもしれませんが)

入試において低迷する工科高校を復活させようと、金沢工業大学の実践を参考として、導入するように府教育庁からの提案されたのが、課題解決型学習（PBL）です。

これは、新学習指導要領にある育成すべき資質・能力の一つとして、問題発見・解決能力とあるところに、もともと工科高校の特色として「課題研究」という、大学にある「卒業研究」のような授業があり、その中で、もうすでに、その資質を育成しているということから、それを充実・発展させていこうという計画と理解しています。

具体的には、全日制の工科高校は1年生「キャリアガイダンス」、2年生「総合的な学習の時間」、を経て、3年生「課題研究」による「ものづくり」や「研究」を充実させるという計画でした。

PBL型授業の導入率については考えていませんでした。ただ、本校の場合、「ものづくり」の実習があります。「ものづくり」は、問題発見・解決の連続です。自然とPBL型授業をしているように思います。また、もうすでに1人1台端末による協同的な授業も行われており、これもPBL型授業にすることもできると考えます。

今後、PBL型授業の導入率をあげるというのも、新学習指導要領にのっとった、一つの観点であるということを検討しながら、学校経営推進したいと思います。

2-(8).その他

Q&A

Q：毎年、課題研究発表会の冊子を楽しんでいただいています。今年も、生徒たちがいろいろと頑張っていて、本当に感動しました。

A：ありがとうございます。今後も、生徒たちの頑張りを見守ってください。